

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu

University Academic Repository

万葉集から見た三輪山と近江遷都の詩歌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 安里, クラタ, アンリ, Kurata, Anri メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/137

万葉集から見た三輪山と近江遷都の詩歌

Poem of Manyoushuu about Miwayama
and Capital Transfer to Ohmi

倉 田 安 里

Anri Kurata

<要 旨>

万葉集は現存する日本最古の歌集である。その内容は、花鳥風月を歌人が感じ取ったものから、相聞、挽歌等、歌人の感情を表したものとされている。

しかし、和歌という日本語の表現については未だに完全に解明されているものではない。歌を詠む際に感じた歌人の感情の裏に、もう一つの想いがあっても不思議ではないのである。

本稿では、近江遷都の際、額田王が詠んだ歌の真意を探究すると共に、和歌という日本語表現手段の一解釈を探ってみることにする。

<キーワード>

額田王 近江遷都 三輪山の歌 山辺の道 天智天皇 天武天皇 柿本人麻呂

はじめに

万葉集は、古代のさまざまな（上は天皇から下は一般民衆に至るまで）人間達が詠んだ歌集であり、古典文学をして古事記、日本書紀とならんで世界的にも有名である。

しかし、万葉集は他の二つの文献に比べて大きく違うものであるといえる。古事記、日本書紀は、いわゆる歴史書であり、古代に起きた事件の記録であって、我々が今日使用する歴史の本と何ら変わるところがない。しかし、万葉集は歌集であり数々の出来事をただ羅列しただけのものではない。多少の歴史的背景はそこから知ることができようが、そこに記されている歌は、ほとんどが個人の気持ち、感情の表現なのである。

つまり、古事記、日本書紀を事件の記録とするならば、万葉集は人間の感情表現の集大成ともいべきものであり、前者が表面的記録であるのに対し、後者は裏の記録である。

万葉集の中に記載されている歌は、二世紀の前半から、八世紀の後半に至る、非常に長い期間の歌を集めているが、この六世紀余りの間に起きた、さまざまな時代背景を、歌という形で、当時の人間が表現したという事は、世界中の歴史を見ても非常に珍しいものではない

かと思える。

中でも、舒明天皇から壬申の乱までの、いわゆる万葉集第一期と呼ばれる時期のものは、さまざまな大きな事件と、刻々と変化する時代背景とに影響されて、数多くの素晴らしい歌が生まれた時期である。近江遷都は、その中でも大きな時代の変化のひとつであり、また、広く知られた事件でもある。

本文は、この近江遷都に関して、万葉集で詠まれた歌を取り上げ、その歌の中で、作者がいかなる感情をもって詠んだ歌であるのかを考え、それによって近江遷都に対して一般人がそれをどう受け止めていたのか、また、遷都後の近江の都を歌人達が如何に表現し、また、どう考えていたのかと共に、その主要な資料とした三輪山の歌の作者である額田王がどのような感情を抱き、歌の中に思いを託したのか、和歌という日本語表現手段のひとつの考え方を考察し、加えて、近江遷都という、歴史に残るひとつの事業がはたして有意義であったのであろうかという事にも焦点をあててゆく。

なお、本文中、中大兄皇子、大海人皇子については、それぞれ即位後の呼称である天智天皇、天武天皇に統一してある。

1. 三輪山の歌とは

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の山の際に い隠るまで 道の隈
い積るまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放煙山を
情なく 雲の 隠さふべしや

反歌

三輪山をしかも隠すか雲だにも
情あらなも隠さふべしや

万葉集巻第一、天智天皇の項に見られるこの歌は、額田王の詠んだ歌で、万葉集の中でも傑作のひとつとされているものである¹⁾。

長歌と短歌それぞれ一首ずつから成っているこの歌は、その表すとおり、三輪山との別れを惜しむという感情を表現した歌であるが、ただ単にそれだけを表現するのであれば、初めの長歌だけでも十分に事足りるわけで、反歌をつけて、表現を強調しており、非常に情熱的な感じも受け、むしろしつこささえ見受けられる。

これはつまり、表面に出ている内容(読んだままの内容)以外に、作者が伝え表現しようとしたものが存在するというひとつの証拠にも思えるのである。

額田王は、三輪山の歌を、三輪山との別れを偲び惜しむために詠んだのではなく、その裏に何か別の意味づけをし、それを表現したかったのである。

三輪山の歌が、どのような意味をもっているかは、万葉集には記されていない。ただ、

額田王の近江國に下りし時作る歌

と歌の冒頭にあり、また、

右二首の歌、山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、都を近江國に遷す時に三輪山を御覧す御歌そ。日本書紀に曰はく、六年丙寅の春三月辛酉の朔の己卯、都を近江に遷すといへり。

と記してあるのみである。したがって、その明らかなる意味づけをした資料が残されていないので、あくまで推測の域を出ないのであるが、現在では、ただ単に、近江遷都の際、額田王が別れてゆく飛鳥の都を偲んで詠んだ歌であるというのが一般的な解釈になっている。

しかし、他のさまざまな事実から考えてみると、それ以外の意味にも解釈することができるのである。

もちろん、前述の解釈が正しくないというのではない。それはそれで確かな根拠というもののもとに考えられた解釈であって、また、そういった意味での解釈が最も適切であるともいえる。

しかしながら、それは単なる表面的な意味であって、その歌の内側に、何か別の、もっと深い意味があるのではないであろうか。

遷都というものは、詠んで字の如く、都を他の土地へ遷すことである。近江より後、遷都は現在まで合計四回行われている。

その中の最後の遷都は、明治維新における東京への遷都であるが、この場合、天皇の住居が移ったというだけで、他にそれ程の変化はみられないのであるが、近江遷都の時は、一都市に住む住民の総てがそっくり移り住むのであるから、その労力たるや実に大変なことだったのである。

その中で、遷都に反対する人間が現れてもおかしくないのではないであろうか。現に、日本書紀には、

三月辛酉己卯、遷都干近江。是時、天下百姓、不願遷都、諷諫者多。童謡亦衆。日々夜々、失火處多²⁾。

と記されている。ここには、庶民達の不満の表れしか記されていないが、当然、役人や宮

廷の中の多くの文化人達にも同じような感情を抱く者がいたであろうことは推測できる。事実、日本書紀には、その他の遷都に関する記事としては、

葛野郡獻白鷗³⁾

とだけしか記されていない。これは、葛野郡の民衆は遷都を歓んだとしても、他の地方の民衆、もちろん飛鳥に住む人々も含めて、歓迎されなかったと考えるべきであろう。

額田王もその一人であったのではないであろうか。ただ単に、三輪山を通して飛鳥の都との別れを惜しむだけであれば、先に述べたように、長歌一首だけでも事足りるのである。わざわざ反歌を一首つけて、その表現を強調しているのは、表面には表れていない、何かもっと感情的なものを意味しているのである。つまり、飛鳥の都との別れを惜しむと同時に、近江遷都に対する、一種の批判をしたのではないであろうか。

また、その上で、なぜ三輪山を歌の題材として選んだのかという疑問も生じてくるのであるが、三輪山は、遷都の際、移動途中にある山であるから当然であるという考え方もあろう。しかし、飛鳥の都を偲び、且つ、遷都に対する批判の意味もあるとすれば、三輪山より、もっと飛鳥に近い山を選んでもおかしくないのである。その山を探すとすれば、大和三山と呼ばれる、天の香久山、畝火山、耳成山の三つであろう。万葉集巻第一に

香具山は 畝火雄々しと 耳梨と 相あらそひき 神代より 斯くにあるらし 古昔も
然にあれこそ うつせみも 襦をあらそふらしき

反歌

香具山と耳梨山とあひし時 立ちて見に來し印南國原

わたつみの豊旗雲に入日見し 今夜の月夜さやに照りこそ

右一首の歌、今案ふるに反歌に似ず。ただし、菖本比の歌を以ちて反歌に載す。

故に今なほ此の次に載す。また紀に曰はく、天豊財重日足姫天皇の先の四年乙巳に天皇を立てて皇太子となすといへり。

という歌がある。これは万葉集第一期ではやはり有名な歌であるが、これは天智天皇が大和三山の山争伝説をもとにして詠んだと思われるが、これによると、香久山、畝火山、耳成山の三山は、それぞれ男と女の山であり、女の奪い合いをしたという要素から成り立っているので、あまり女性の歌人が題材にできるような印象のものではないはずである。

一方、三輪山の方を考えて見ると、

此天皇之御世、疫病多起、人民死爲儘。爾天皇愁歎而、坐神林之夜、大物主大神、顯於御夢日、是者我之御心。故、以意富多多泥古而、令祭我御前者、神氣不起、国安平。是以驛使班干四方、求謂意富多多泥古人之時、於河内之美努村、見一得其人貢進。爾天皇問一賜一之汝者誰子也、答曰、僕者大物主大神、聚陶津耳命之女、活玉依毘賣、生子、名櫛御方命之子、飯肩巢見命之子、建甕槌命之子、僕意富多多泥古白。於是天皇大歡以詔之、天下平、人民榮。即以意富多多泥古命、為神主而、於御諸山拜一祭意富美和之大神前、又仰伊迦賀色許男命、作天之八十毘羅訶、定一奉天神地祇之社、又於宇陀墨坂神、祭赤色楯矛、又於大坂神、祭墨色楯矛、又於坂之御尾神及河瀬神、悉無遺忘以奉幣帛也。因此而 氣悉息、國家平安也⁴⁾。

という古事記の神話からもわかるように、非常に神格化された山であった。事実、三輪山の麓には大神神社があり、山そのものが御神体として祀られている。前述の大和三山に比べれば、やはりこちらの方が他の地へ赴く人間にとっては印象に残る山であるといえる。額田王も、神格化されたその山の眺めを通して、飛鳥の都に対する惜別の情とともに、そうせざるを得なくなった、遷都という事実を恨みがましく思ったのではあるまいか。

額田王は、三輪山の歌をどのあたりで詠んだことになるのであろうか、また、それはどのような状況下にあったのであろうか。

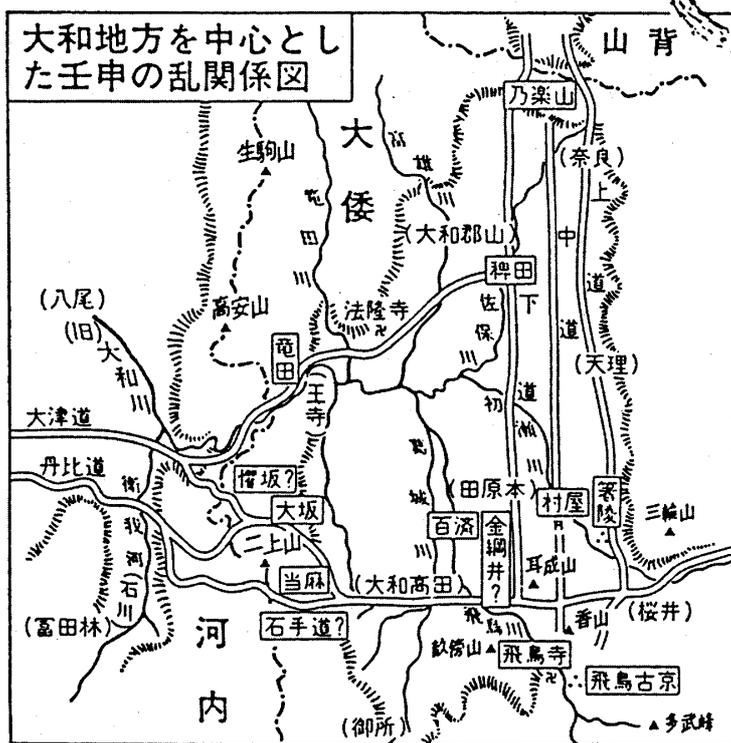
当時、飛鳥から近江方面へぬける道は大きく分けて三つあったと考えられる。それは日本書紀に、

將軍更還本宮。時東師頻多臻。則分軍、各當上中下道而屯之。

という記述があることからうかがうことができる。これは、壬申の乱における、吉野方の兵力の配備状況を表したものである。すなわち、近江方の侵攻兵力を、上、中、下という三つの道において迎撃するために、吉野方の指揮官が兵力を三等分して敵を迎え討つ指示を与えているのを記したものである。

ここで、これらの上中下の道がどのあたりかと考えると、一本目はなら盆地の東側の山並みに沿った道。二本目は香久山と耳成山の間を抜ける道で、現在のJR桜井線と近鉄橿原線の通っているあたりをゆくもので、それぞれ、ほぼ平行に南北を貫いているものであると思われる。(図1)⁷⁾

図1



また、日本書紀の註釈にこの上中下の道のことを、

奈良盆地を南北に貫く三本の道路。上つ道は桜井市から盆地東端の山沿いを北上、天理市をへて奈良市東部に至る。中つ道は高市郡明日香村から天香久山・耳成山の間を北上、奈良市大安寺付近に至る。下つ道は橿原市八木から盆地中央部を北上、磯城郡田原本町、大和郡山市東部をへて山城方面に通じる。

としていることから、三輪山に近い方から上、中、下の順になっていることがわかる。

なぜ東側から上中下となったのかは定かではないが、ともかく、この三本の道のいずれかを額田王の一行が近江へ向かって移動したのである。

そこで、この三本を絞って、額田王がどの道を通ったかということを追求してみることにする。

まず、下つ道であるが、近鉄橿原線のあたりであるという仮定のもとに考えると、三輪山こそ見えても、歌の意味にあるように、見つつ行かむをなどと、とてもいえる状況ではないように思われる。その意味に於いては、やはり中つ道も除外してよいであろう。

そうなるとやはり、上つ道を通ったとするのが最も適切であると思われる。山々の間に、また、道のかげになって見えなくなるまで見つけたいと詠んでいるその内容ともほぼ一致するその道は、現在残されている山辺の道と同じ道のりであったのであろう。

現在の山辺の道は、桜井線から天理市までの約十数キロしかないが、その途中の右手に、

三輪山を望むコースである。三輪山が、ちょうど木々の梢に隠れて見えなくなるあたりに大神神社があり、ここに三輪山に歌の碑が建てられている。

これはもちろん後の世に建てられたものであるが、この碑の位置から三輪山を仰ぎ見ることとはできない。さらに、十分程歩いて、手前の丘程の山と山の間にあたる部分から最も大きく見えるのである。

さらに、そこから三十分程歩くと、道は山裾を離れ、盆地の方へ降りてゆくことになる。そして、さらにしばらく行くと、遠くの方に景行天皇陵と崇神天皇陵が見えてくるが、このあたりからの三輪山の展望もとても素晴らしい。そして、おそらくこのあたりまでに三輪山の二首に歌を詠んだのであろう。これから先は、三輪山自体、距離的にも、また、方角的にも見づらくなるからである。

もちろん、先に述べたように、当時の道が現在の山辺の道とほぼ同じであることは間違いないが、全く同じであったという訳ではない。ある部分は数メートルも違わない所を通ったであろうし、またある部分は一キロ以上離れていたかもしれない。

しかし、いずれにしても、この付近を飛鳥から近江へ移ってゆく額田王が通ったのはほぼ明らかで、その途中、視界の中にそびえる三輪山を通して、自分自身の感情を込めて歌を詠んだのであろう。

また、その際に移動組織の編成であるが、どのようなグループに分かれて移動したのだろうか。

政策に批判的な内容の歌を詠むのであるから、当然、政治に関与する中心人物とは別であったであろう。一都市の住民がそっくりそのまま移動するのであるから、それは何日も、いや、何ヶ月もかかったであろう。

日本書紀には、それ等のことについて詳細に記されていないが、遷都の記事について数ヶ月を費やしているため⁸⁾、おそらく、相当の日数を要したであろう事は間違いない。

つまり、幾段階にも分けて編成を組んだのであろう。先発は軍隊と、新都の設営に関わる隊であったであろうし、農地、その他周辺の開発の為に一般市民も初期のうちに移動させておく必要もあったであろうから、宮廷に係する女官や文化人達は、比較的後の方の隊に含まれていたであろう。

もちろん、天智天皇等の主要人物は、指揮統制の為、先発隊に含まれていたであろうから、額田王とはかなりの間隔があったものと思われる。

2. 近江の都（何故、近江遷都なのか）

ここで、天智天皇は、どのような理由で近江遷都を行ったかということについて考えてみる。

ここでいうのは、何故遷都を行ったかということよりも、むしろ近江という場所を遷都地

として選んだ理由について触れてみたい。

近江遷都の理由としては、多くの説が唱えられているが、一般的には、

- 一、飛鳥の反対勢力から逃れる為。
- 二、白村江の水戦による敗戦で、唐の侵略に備える為。
- 三、前述の事柄から、人心を一新させ、新たな政治を行う為。

主に以上のようなことが考えられる。

これ等の理由が正しくないのではない。むしろ、遷都の理由の一部にこれ等のことが加味されていたであろう事は間違いない。しかし、それだけの理由であれば、何も近江でなくても、他の土地で十分なのである。

要するに、地理的理由はあまり重要ではないのである。もし、地理的な理由で強いて挙げるとすれば、やはり、対外戦略上のものであろうか。唐軍がもし本土に上陸した場合、大坂湾側からの侵攻であれば、当然飛鳥より時間が稼げるし、日本海側からの侵攻であってもその連絡が比較的スムーズに行えるので、対策を立てやすい。

湖は万が一という時の最終防衛線になるし、東北地方へ出動する場合も有利である。また、瀬戸内海とも水路でつながっており、地理的に好条件であったと思われる。後の世の信長と同じような考えであったとっていいであろう。

しかし、それ等はみな、対唐戦の敗戦が確定した場合のみの理由であって、応急的なものになってしまう。

是冬、京都之鼠、向近江移。

これは、日本書紀の一節であるが、遷都に先立つ数ヶ月前にその兆候があった事を表している。この鼠による遷都の前ぶれは、

冬十二月乙未朔癸卯、天皇遷都難波長柄豊碕。老人等相謂之日、自春至夏鼠向難波遷都之兆也⁹⁾。

という所から多く見られるようになるが、

五年春正月戊申朔夜、鼠向倭都而遷¹⁰⁾。

鼠向倭都、遷都之兆也¹¹⁾。

という記述がやはり近い年代に見受けられる。

実際に鼠が移動したのかどうかは疑問であるが、政策上の秘密事項が少しずつ外部に漏れるのは仕方のないことで、一般に広がった噂を採り上げてこのような記述として残していた可能性はおおいにある。

天智天皇は、新国家を建設するのに、近江を中心とするのが最も適当だと考えていたのであろう。ただ、その時期が、戦局の悪化によって短縮されたのである。

それによって、一般民衆の不満もしくは不安も一層激しくなったのではないであろうか。そして、それが結果として、基礎の不確立から早期の崩壊を招いたのである。

結果的に、近江の都は非常に短い期間で滅んでしまったわけであるが、その廃れた近江を、同じ万葉の歌人達がどう受け止めているか、いくつか挙げて考えてみることにする。

近江に荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麿の作る歌

玉櫛 畝火の山の 檀原の 日知の御代ゆ (或は云ふ、宮ゆ) 生まれしし 神のことごと
と 樛の木 の いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを (或は云ふ、めしける) 天に
みつ 大和を置来て あをによし 奈良山を越え (或は云ふ、空みつ大和を置きあをによし
奈良山越えて) いかさまに 思ほしめせか (或は云ふ、おもほしけめか) 天離る
夷にはあれど 石走る 淡海の國の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ
天皇の 神の尊の 大宮は 此處と聞けども 大殿は 此處と言へども 春草の 繁く
生ひたる 霞立ち 春日の霧れる (或は云ふ、霞立ち春日か霧れる夏草か繁くなりぬる)
ももしきの 大宮處 見れば悲しくも (或は云ふ、見ればさぶしも)

反歌

ささなみの志賀の辛崎辛くあれど 大宮人の船待ちかねつ

ささなみの志賀の (一に云ふ、比良の) 大わだ淀むとも 昔の人にまたも逢はめやも
(一に云ふ、逢はむと思へや)

万葉集巻第一に見られるこれらの歌は、その註釈の通り柿本人麻呂の作であるが、ここには、人々がいなくなって荒れ果ててしまった近江の都を、とてもいたましく思う感情がよく表れている。また、この長歌の中で、神武天皇以降、代々の天皇が大和の地で国を治めていたのに反し、近江のような辺境の地に遷都をした天智天皇を批判するような内容を持っており、反歌二首も、それぞれ、ほぼそれに準じたもので、前の長歌を助けているのがわかる。

柿本人麻呂は、生没年ともに不詳ではあるが、万葉集に非常に多くの歌を載せた代表的な

歌人であり、持統、文武の両天皇に仕えたといわれているが、前記の歌は、持統天皇の代に詠んだものである。一般には単なる宮廷歌人とされているが、歌聖と呼ばれて、後に次第に神格化されていった。

万葉集に、持統天皇が吉野宮に赴いた際、これに従って詠んだ歌等があるところから、天皇の側近的な存在であったのではないと思われる。

その人麻呂が、近江の都に関して批判的な歌を詠むということは、持統朝の頃は、近江遷都という過去の事実を、あまり良くは見えていなかったのである。

柿本朝臣人麿の歌一首

淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば 情もしのに古思ほゆ

前記の反歌二首もそうであるが、この歌から、近江の都が一時的にせよ栄えていたと考えられる表現もしているところが大変興味深い。

また、それ以外にも近江の都の滅亡後、その地を哀れんで作られた歌は多い。

高市古人、近江の菖堵を感傷みて作る歌 (或る書に云はく、高市連黒人といへり)

古の人にわれあれやささなみの 故き京を見れば悲しき

ささなみの國つ御神の心さびて 荒れたる京見れば悲しも

註釈には、高市連黒人と同一人物と記してあるが、高市連黒人の作とする歌は、万葉集に十首以上載せられており、それによると、やはり人麻呂と同じく、持統、文武両天皇に仕えていたらしい。

これ等の歌は、人麻呂のものと少し違い、明らかに近江の都を哀れむ為に詠まれたものであることが註釈からもうかがえる。また、「ささなみの國る御神の心さびて」とは、天皇の政治の不手際から、近江の都が廃れてしまったという事を指摘しているんおではなかろうか。

その他にも、高市連黒人の名前で、近江に関する歌を載せている。

高市連黒人の近江の菖き都を見せつつもとな

如是ゆゑに見じといふものを楽浪の 菖癸き都を見せつつもとな

右の歌は、或る本に曰はく、小辨という者を審やかにせず

作者については明らかにする必要もないのであろう。しかし、歌の内容からすると、どうも作者は栄えていた頃の近江を知っているかのような調子ではあるが、やはり他の歌同様、近江の都に対する悲愴感がよく表れている。

これ等の歌を考えると、どれも、近江の都が、短期間にせよ、華やかであったという事の証になるであろう。

3. 額田王と天智天皇

ここで、額田王自身の事について少々考えてみる事にする。日本書紀には、額田王については、

天皇初娶鏡王女額田王、生十市皇女。

とあるのみで、詳しくは記されていない。これによると、天武天皇の妃となって子供を産んだと解釈できる。ところが、実際はそうではなく、少々異なっていたらしい。

天皇、蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌

あかねさす紫野行き標野行き 野守は見ずや君が袖振る

皇太子の答へましし御歌（明日香宮に天の下知らしめしし天皇、謚して天武天皇といふ）

紫草のにはほへる妹を憎くあらば 人妻ゆゑにわれ戀ひめやも

紀に曰はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、蒲生野に縦獵したまふ。時に大皇弟・諸王・内臣、悉皆に従そといへり。

この歌から、額田王は天智天皇の妃であった事がわかる。天智天皇の妃ではあるが、天武天皇に思いを寄せていたという内容であるが、おかしいのは、万葉集巻第四に、

君待つとわが戀ひをればわが屋戸の すだれ動かし秋の風吹く¹³⁾

という歌が載っているということである。近江天皇とはいうまでもなく天智天皇の事である

から、ここでは明らかに天智天皇に対する愛情というものがうかがえる。

十市皇女を産んだのは事実であるから、一時的な期間にせよ、天武天皇との交際が存在したのは確かな事である。また、前記の歌も詠み合ったという事にしても、天智天皇を慕う歌も載っているのは何故であろうか。

また、蒲生野の歌は、明らかに相聞歌であるのに、何故雑歌の項に分類されてしまっているのであろうか。詠んだ人間の感情を無視したか、或いは、そのような感情とを持たずに詠まれたかという事が考えられる。

これはおそらく、万葉集編纂の過程に問題があったのではなかと思われる。すなわち、その編纂に大いに関与した大伴氏は、壬申の乱では、天武天皇方について活躍したという事実である。

同時に、日本書紀についても、持統天皇の時代に編纂されたものであるので、天智天皇を慕っていた額田王についてあまり詳細な記述を載せたくなかったとも考えられる。

万葉集の始めの部分に、天智天皇批判の歌を載せたのもその為であろうか。そして、ある意味では白々しく天武天皇との相聞歌を載せているのである。まさか、偽物の歌を作って載せるわけではないので、そのような小細工ともいえる演出を行ったのであろう。

また、三輪山の歌の後に、

へそがたの林のさきの狭野榛の衣に着くなす目につくわが背

右一首の歌は、今案ふるに、和ふる歌に似ず。ただし、菖本この次に載す。故以になほここに載す。

という歌が載せられている。これは、その註釈によると、井戸王という人物の作であるという事になっているが、この井戸王なる人物どういった人間であるか明らかにされていない。

しかし、「わが背」などという言葉が含まれていることから、女性である事は間違いないのであるが、実はこの歌が額田王の作であるという考えもある。

仮にそうだとすると、「わが背」というのはやはり天智天皇の事をさすが、前記したように天智天皇は先発しているのです、それもあてはまらなくなる。ただ、それは人物のみを想っている場合であって、もし、飛鳥に於いて政治を行っている天智天皇のイメージを「わが背」とすると、これも一つの愛情表現とともに、遷都反対の意志の表れではないであろうか。

まとめ

以上述べてきた事を総合すると、結果的にみて、近江遷都という一つの事業は、予め準備されていたにも拘わらず、対外戦略の失敗から、非常に切迫した状況で行われてしまった為、

事実上不成功に終わってしまった事になる。

それについて、遷都以前から批判の声が多くから起こっていたのであるが、その中で、額田王が三輪山の歌をもって代表しているのである。これは、額田王自身、直接宮廷に関わる人物であったか、政策に意見具申できる人物であったかが疑わしい為、三輪山の歌をしたためて、せめてもの遷都反対の意志表示を行ったのではないであろうか。

かからむの懐知りせば大御船 泊てし泊りに標結はましを

天智天皇崩御にあたって詠まれたこの歌は、天智天皇の政策に対して、後悔意味が含まれているのである。三輪山の歌による反対の意志を表しただけではなく、直接批判を下した方が良かったのではないかという感情の表れであったのであろう。

万葉集による古代人の感情探究はその周辺資料の不足から非常に困難なものになっており、正確な判定を下す事は不可能に近い状況であるが、同じ人種である以上、その気持ちは変わらないのであるから、ある程度までの推測でも大抵の判断はできるであろう。三輪山の歌に関する一連の事象もそういう観点から見れば、以上のようなもので十分許容できる範囲の解釈であると考えられる。

脚註

- 1) 一部にはこの歌を天智天皇の歌ではないかとする説もあるが、内容がどう見ても女性的であり、他の天智天皇の歌とも趣を異にするところがあり、また、自らが行った遷都に批判批判的である為、ここでは額田王の作と断定する。
- 2) 『日本書紀 下』367頁 岩波書店 古典文学大系 1965年
- 3) 前掲 『日本書紀 下』367頁
- 4) 『古事記』178～180頁 岩波書店 古典文学大系 1958年
- 5) それ以来、神格化されたのかどうかは不明である。
- 6) 前掲 『日本書紀 下』403頁
- 7) 『日本の名著1 日本書紀 下』中央公論社 昭和58年
- 8) 前掲 『日本書紀 下』では、三月の次に六月が来ている。
- 9) 前掲 『日本書紀 下』279頁
- 10) 前掲 『日本書紀 下』321頁
- 11) 前掲 『日本書紀 下』323～325頁
- 12) 前掲 『日本書紀 下』411頁
- 13) 『万葉集 巻一』岩波書店 古典文学大系 245頁 1957年
なお、巻八にも同歌あり。

参考文献

- 『万葉集大成 九』 平凡社 昭和28年
『万葉集大成 二十一』 平凡社 昭和31年
『古代国家の成立』 直木孝次郎 中央公論社 昭和58年
『万葉一文学と歴史のあいだ』 吉永登 創元社 昭和42年
『万葉秀歌』 齊藤茂吉 岩波書店 1938年
『万葉の旅(中)』 犬養孝 社会思想社 昭和39年
『万葉集の風土』 桜井満 講談社 昭和52年
『万葉群像』 北山茂夫 岩波書店 1980年
『古代歌学の形成』 小沢正夫 塙書房 1980年
『万葉集の表現の研究』 山崎良幸 風間書房 昭和61年
『萬葉集とその世紀 上』 北山茂夫 新潮社 昭和59年
『万葉を考える』 梅原猛 新潮社 昭和56年